

バ美肉パパは駄弁りたい

6 7 5 4 6 5

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

娘と色々喋りたい↓わかる

でも、話のタネがない↓わかる

なので、バ美肉する↓何で???

此方の小説は煉瓦様作「美少女になってちやほやされて人生イージーモードで生きたい！」(<https://syosetu.org/novel/217501>)の二次創作です

目次

番外編

閑話「ゲーム配信です」 | 1

本篇

私がバ美肉Vtuberになった訳 | 8

お菓子について話しましょう | 11

帰り道の買い物は余裕をもっていきましょう。 | 18

あなたの欲しいものは何ですか？ | 33

番外編

閑話「ゲーム配信です」

○

(とある家庭のひと時)

「…そういうばさくパパ」

「…ん？どうしたの、今宵」

今日は休日。仕事も無ければ出かける予定もないため、二人でゆつくりと居間で寛いでいたところである。

娘はというと…ソファーに寝そべり、スマホで誰かの配信を見ているようだった。

声を掛けられてたので、娘の方に視線を向ける。目線があつた後、娘はスマホの画面を見せて言った。

「パパってさ、ゲーム配信とかしないの？」

「…ゲーム配信ってあれかな？ホラーゲームとか？」

「そうそう、パパの配信見たけどさ…会話デッキ構築しかしてないの？飽きてこない？」

「う〱っ…確かに言われてみるとそうかも」

娘にそういわれ、少しドキツとしてしまう…他のVの配信を見ている、箱おばや無人島人狼、わんたまなど、いろいろなゲームの配信をしているのが多だろう。

ゲーム以外だとしても、お歌配信やお絵かき配信など、自身の能力を生かした配信が多い。

「でしよー？、いつまでも同じようなデッキを作る…じゃなくて、別の事すれば、人も増えると思うよ？」

「…うーん、なるほどね…でも何をしようかな…」

「家にあるじゃん、アタシスが」

「ああ…あれね」

娘から提案されたことについて考えてみる。この際、新しいことに挑戦してみるのも一つの手だろう。

「…わかった、じゃあ、今度の配信でやってみるね」

「うんうん！頑張つてだよ！私は陰で応援しとくからー！」

「はいはい…」

ここまで期待されたやらないわけにはいかないだろう。

● 後で配信の枠を作るのと、告知をしておくことにしよう…

『はーい！皆さんこんティアー！、マネツティア・ブルースターです！』

こんティアー！

何時もの配信とは違うと聞いて

おっ、ゲームするんか!?

『ええそうですよ、今回はいつもと違ってゲーム配信です』

今回はゲーム配信をすると告知したが、リスナーの反応は悪くはないようだ…

『さて、告知でもしましたが…今回するゲームは「大健闘アタックシスターズ」です！』

このゲームは長いシリーズ物でもある…幅広い層が遊び、知名度があり、そしてなおかつ私も遊んだことのあるゲームとすれば、これ以外になかったのである

これかあ…

よーし、おじさん暴れちやうぞー

参加します

『はーい、分かりました。それでは部屋を立てますので、少し待つてくださいね…』

リスナーの意気込みや、参加します、などといったコメントに安心する…

部屋を立て、IDとパスワードを画面上に記入し、入室者を待つ。今回私を使うのはデンチュウである。人気もそれなりにあるため、ある程度コンボ動画などを見て練習はしたのだ。

『さてさて…誰が来ますかねつと…おっ?』

入室者のアイコンが出てきたようだ…とりあえず一人目である

『初、一番乗りですね…よろしくお願いします。えっと…？使用キャラはプデインですね…』

一人目はプデインか

どれほどの実力かによるけどね

上級者のプデインは怖いぞ…

この方がどれだけの実力を持っているのかは分からないのだが、全力でやっていくことにしよう。

『では、記念すべき第一試合、よろしくお願いします』

スタートボタンを押し、ゲームをスタートさせる…

えっと…小ジャンからの空N始動って…あれえ…？この人強くない？

安易なダッシュ攻撃はガードから確反される…隙あらばキャリアーされる…

暴れもきつちり後隙を刈られる…

『待って…待って!!!!この人強くないですかあ!!?』
流石にお相手強い。

スマッシュ上手いなあ

私があまり上手くないということもあるけど、此処まで一方的なのってあります？

復帰は…上Bからの台座内側って…

『あゝあゝあゝっ！復帰ルート読まれた！、まずいまずいまずい！』

そこスマッシュ置いてくるのお!?

どうしようどうしよう…全然%溜まっていないのにもう1ストック無いんだけど！

あばばばばば…ああっ！横B暴発した…

『いゝやあ…これは本当にダメですね…幸先悪すぎませんか?』
復帰焦って横B暴発って何なんでしようね…ホント

悲しい事故を見た

さすプデイ

可愛い

『はい、切り替えて次の方に行きましょう…』

本当に何なのだろうか…最初はカツコよく勝って勢いを付けたかったのに…

『…気にしても仕方がないですね、次の方は…ルシナですね』

さっきのプリンは一度忘れよう、うん…その方が安心できる

『では、第二試合、よろしくお願いします！』

それではやっていこう…今日の配信はそれが目的なのだから…

………

『あばばばばばば…ガード割れるガード割れるううう!!ダメダメダメ!、じゃんけんはヤダ!、じゃんけんはヤダ…』

魔王様には圧倒的なパワーとじゃんけんに翻弄され…

『埋め込みジャッジはヤダ…上投げジャッジもヤダ…埋めないで…埋めないで…!』

ミスターには埋められたり、投げジャッジをされ…

『…ハンマーはヤダ…そんな大技降るな!大きいのを降るな!大きいのはダメだつてえ!!』

星の騎士には翻弄されて…

『よしよし…ダメージがいい感じに溜まってきましたね…よし、上投げ雷ツிட்டた大きい!!やったやった!!勝った!勝ちましたよ!』

時々ではあるがこちらが勝ち、その勝利に喜び…

『あ”あ”あ”あ”眠るがくる…眠るがくるう…やだやだやだ…眠るはヤダ…眠るはヤダ…!キヤリーしないでええええ!!』

登録者数が少ないがゆえに、最初に入ってきたプティンと再戦することになり、お手玉するがごとく逝かされてしまい…

『これで逝って!!…逝かない…なんで…もう一発?…これで逝か、逝かないいい、逝かないの何でえ??…これで逝って!!三発目っ!よしっ逝った逝った!!』

対戦でうまい人と戦い一喜一憂し…

『あばばばば…あ”っ…もう…逝かされた…思いつきり逝かされた…もう…』

その後に普通にリスナーもてあそばれる対戦ばかり…

.....

『はあ…はあ…今日はここまでにしましょうか…』

流石に二時間もガチガチに対戦すると疲れてくる。今日はここまでにしておこう…試合途中はコメントも何ひとつ読むことどころか、見ることも出来なかったしね…

『皆さん今回の配信に来ていただきありがとうございます…はい、今回の配信で私はトラウマが凄まじく増えてしまいました…』

こんなに強い人ばかり来る配信…アタシス配信はこんな人たちが来ないのだろうか…そうだとしたら今後やったとしてもまたボコボコにされるのだろうか…

トラウマ量産されてて草

今回は助かる配信でしたね…

『はあーい…そうですね、私がいまいちうまくないからか、皆さんにボコボコにされるだけの配信でしたね…』

勝率はどうかだろうか…多分3割切つてそんな気がする…

そつちじゃない…

…聞いてて恥ずかしくなってきた…

センシティブはパパでしたね

これが妻子持ちのパパって本当ですか？

助かるから毎週アタシス配信しよ？

あれ？ここのコメントは何を言っているのだろうか…

『どこがですか？唯々騒いでいただけの配信だったと思うんですけど…』

無自覚…だと…？

これはエロツティア

エツチだからこれはサキュツティアですね間違いない…

散々な言われようである、何でこんなにセンシティブ扱いされているのだろうか

『あー…手がかじかむからエアコン切っていたんですけど、べたべたしてきましたね…そろそろ配信を切ろうかと思えます』

さっさと終わらせてシャワーでも浴びようか…

『それでは皆さん、今回のゲーム配信にお付き合いくださりありがとうございます。うございしました…今度はいつするのなかは何ひとつ考えていませんが…いつかまた、こういう機会があればやりたいですね。それでは皆さんお疲れ様でした…ばいばーい』

○ 今度の配信も待ってるからね…

「ふう…」

配信を終え、シャワーを浴びる。ゲームに夢中になってしまったのもあるが、エアコンを切っていたせいかな全身が汗だくになってた。こうやって遊ぶのは凄く楽しいのだが、熱中するととても疲れてしまう…

身体を拭き、シャワー室から出て着替える。確か冷蔵庫に買っておいたジュースがあるから、それを飲むとしようか…

そう思いながら台所へ向かうと、娘がこちらを見ている…なぜだかジトつとしており責められているような気がする。

「今宵…さん？、どうしたのでしょうか…あの…そのような表情を私にむけて…」

「…今回の配信、見たの」

「ああ、うん…ありがとう…あまり面白くなかった？」

「いやっ…そっちなじゃないんだが？…はつきり言うと…その…」

少し言葉を選んでるように感じる、何かまずい事でもしてしまっただろうか…

「…えっちだった…」

「…はっ??エッチ…なんで??」

「自分どんな声しているのか知らなかったの…?声だけだと完全にエッチしているようにしか聞こえなかった…」

「…ちよつとまって…ねえ…それ本当!」

「…うん」

「…あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ…」

娘の言葉を聞き、完全に崩れ落ちる：かんっぜんに失敗した：
この後、エゴサしてみたのだが、スケベだの、サキユバスクイーン
といった印象が根付いてしまうことになってしまった：

本篇

私がバ美肉V t u b e rになつた訳

…とある配信サイトの画面に、一人の女性の姿があった。

その画面には、自己紹介と銘打った文字が書かれており、初配信であることが告知されていた。

『皆さん、初めましてー。バ美肉V t u b e rのマネッティア・ブルースターと言います』

画面に映る少女が動くとともに音声の流れ始めた。音声については何かの機械、もしくはアプリを通して聞いているのだろうか、ふつうに聞くには少し割れているように聞こえてくる。

初めまして

こんばんわ

『はい、初のコメントありがとうございます。そしてこんばんわ』

コメントに反応して少女の顔が動く。しかしそれ以外の手や腕といった部分は動かないようである。

『それでは自己紹介させていただきます。私がなぜ配信を始めようと思ったのは、皆さんに力を貸してほしいからです』

ほーん、何でしょうか

『実はですね、私には娘が一人いるんですよ。』

はい？子持ち

子持ちでバ美肉はどうなの…

『バ美肉するかしないかは本人の好きでいいでしょうに、まあこのことは置いといて配信の目的についてですよ。』

こほん、という息をつく声が聞こえる。

『私の配信の目的としては、娘と会話するための「会話デツキ」と言うモノを作ることです』

なに？会話デツキ？

何で？娘さんと普通に会話したらええやん

『いやっ、それがー：ですねえ：実は私、娘と会話が出来るようになったのがここ最近なんですよね。私自身が仕事で忙しいうえ、出張などで家にいかなかったことが多かったので：娘の成長と一緒に過ごしたわけではないですし、ここ最近の話題についてはですね、私自身何一つ理解していないことも多いですし』

『そうかそこまで会話したいとか娘さん可愛いの？』
『そうですね：少なくとも見た目に関しては100点中1000点ですかね。私自身の感想も入っていますけれども』
いやに堂々と言ったな

『なるほど？少し語ればいいですか？』

少し言葉に含みをもたせるようにつぶやくと、まるで放水が始まったかのように語り始めた。

『そうですね、ここ最近と言えばやはりお土産のシュークリームを買ってあげたことですかね。ええ、そのときに見せてくれた顔と言ったらすごく素敵だったんですよ。もう：こう、ゆっくりと一口一口かみしめるように味わっていてですね：その時の表情なんて目がもうたらーんと垂れていたんですよね。それでいてほっぺたなんてもうぷつくらと膨らんでいてまるで宝石のようになっていてですね：そのとき映像に取っていないなかったのは失敗したなあって今でも後悔してるほどですし』
ストップストップ

落ち着け？

『あー：申し訳ありません、まあこういうわけでした、私は娘と語りた
い：：というよりは駄弁りたいのですが、どのような会話をすれば娘とより仲良くできるかなーと思ひまして、そのため、配信を通じて皆さんと一緒にデツキテマ：まあ、会話の種を作っていきたいかなー
つて思っています』

そういう方針なのね

『はい、そういう方針です。それでは今回は簡単な自己紹介と、配信の方針を述べさせていただいたところでお開きとさせていただきます。』

それではみなさん、さよーならー』
さようならー

バイバイ

○

「…ふう、配信って意外と体力を使うんだね…」

配信を終え、パソコンの電源を落とす。今日は休日、一日中家におり、炊事、洗濯、掃除などを行っており、その後に丁度いい具合に時間が残っていたため配信を行っていたのだ。

「…そろそろ四時になるか…あの娘も帰ってくるだろうし、夕飯の支度でもするか」

自室の部屋を出て、台所に向かう。今から作り始めれば丁度いい時間に仕上がりそうだ

「ただいまー」

玄関の扉が開く音がする、それと同時に娘の声が聞こえてきた。

「…おかえり今宵、今日はいつもより早かったね」

「ただいま、今日はホームルームがいつもより早く終わったんだよね」

「…そうなんだね、ご飯は今から作るから、部屋で待っていてくれる？」

「うん！わかった」

靴を脱ぎ、玄関から上がってきた娘に声を掛ける。

「…なにか持っていく？」

「ん、いや大丈夫、何もいらないよ」

「…そう」

そういつて娘は部屋に入ってしまった。

「…なにか話題でも作って話でもするかな」

そのよう会話をしつつ、今晚の料理作りに入るのであった。

お菓子について話しましょう

『皆さん、こんティアー。マネツティアー・ブルースターです』
こんばんわー

どうもこんばんわー

コメント欄に挨拶のコメントが書かれている。まだ配信を始めて短いけど、こうやってコメントを貰うのは嬉しいものだ。

『はい、皆さんコメントありがとうございます。まあ二回目ですけど、皆さんと一緒に楽しく放送していきましょう。』
はーい、

初見です

あ、初見さんだ。興味を持って見に来てくれたのであろうか。

『あ、初見さんですね…こちらの放送を見ていただきありがとうございます。それでは、今回の会話デッキの内容について考えていきましょう』

一度言葉を切り、改めて言葉を発する。

『今回のテーマはこちら！「おしゃべりにおススメのおやつ」です！』
おやつ？

なんでおやつなんです？

会話のテーマとしてはおかしくないか？

コメント欄に少し困惑のコメントがある。まあ、きちんと説明を入れておこう

『まあこれを選んだのは理由があるんですよ…皆さんは友人や家族と会話するときってどのような時ですか？』

まあ、友達なら友達の家とかかなあ

自分はファミレスでご飯食べたとかしているかなあ

家族とは基本家で会話するだろうしなあ

『そうですね…皆さんは友達や家族とおしゃべりするときはそのような場所で会話をしますよね。で、皆さんはその時にお菓子や飲み物を

用意しますよね?』

あー、確かにね、

友達の家に行くときはお菓子とかジュースを買っていくわ

『そうですね?お話をするだけでは口が寂しいですし、のどが渇いたりして気分が少し沈んだりしますよね。私自身も、何もなしにずつと会話できるわけではありませんし』

少なくとも私の場合ではあるが、最低でも飲み物の一つは用意している。

流石に何か飲み物の一つは無いと厳しいわな

会話の楽しみのアクセントにもなるからな、お菓子は

あ、このコメント良いな

『お、良いコメントありがとうございます。そうですね、ただおしやべりをするためだけにお菓子を食べるのではなくて、お菓子から会話をつなげるためにも、皆さんにはおススメのお菓子を選んで、決めていきたいというわけです』

一応聞くけどどんなのがいいか指名はある?

『そうですね…あまり凝ったようなものは避けたいですね。準備などに手間取ってしまうとおしやべりをする時間そのものが少なくなってしまう。なので、多くても二つくらいにしましょうか』

大掛かりなものを用意してしまえば、その分片づけなどに時間がかかってしまうだろう。それは出来るだけ避けたいと思う
分かったよ

そうだね、だったらアイスとかどうよ

『なるほど…アイスクリームですね、アイスにも種類がありますし、色々な味とか選択出来てよさそうですね。何味のアイスクリームがいいでしょうか』

定番だとバニラかチョコレート

いや待て、ここはチョコミントを押すべきでして…

いやいや、ここはストロベリーをだな

しまった。コメント欄で会話が始まってしまった…とにかくこの

場を抑えないと

『あー…コメントがすごい勢いで流れていきますね…とりあえず、こは定番の味であるバニラとチョコレートで良いでしょうか』
ストロベリーは？

だからここはチョコミントを使うべきであつてな

ここは強引に感じるであろうが切らせていたどころ

『いや、皆さんが押している味もとても良いものだと思っています。しかし、あまり数を用意しても食べきれないわけではありませんし、私自身もちよつと食べきる事が難しいと思います』

分かった、確かに多く準備するのは難しいわな

ここは配信者が決めたことに従うまでだな。

『皆さん、私のわがままに合わせていただきありがとうございます…もちろん、これ以外にあげていただいた意見については、また別の日に参考にさせていただきます』
ええよ

また別の日に使ってくれるならいいよ

『はい、ありがとうございます…うーん、アイスだけじゃ少し物足りないですね…あと一つ追加して、飲み物も考えていきましょうか』
オツケー

あと一つね

『そうですね…一つはアイスクリームで決定しているので、これにトッピング出来そうなお菓子がいいですかね』

これに合うお菓子かあ

やはり種類が多いから難しいだろうか…

個人的にはビスケットがいいぞ

あ、良かった…意見が出てきた

『ビスケット、ビスケットですね…これはバニラとかに添えて一緒に食えるといった感じで良さそうですね』

一緒に食べてもいいし、砕いて混ぜて食べてもいいぞ

『分かりました。二つ目のお菓子についてはビスケットで良いです

ね。あとは…これに合う飲み物ですね』

これに合う飲み物か

二つとも甘いものだからね

『そうですよね、これについてはビスケットが候補に入っているので、炭酸系はちよつとキツイかもしれないですね』

一度やってしまったことがあるが、あれはすさまじく喉が痛くなつてしまった。

ビスケットはまあパサパサするからね、喉にはあまりよろしくない

これには牛乳とか、カフェオレとかが良いのでは？

『なるほど…ここは後者の意見を採用させていただきますでしょうか。と、言うわけでした。今回用意する飲み物はカフェオレで決まりですね』

了解

今回は良い感じにまとまったのでは？

『ええ、皆さんのおかげで大体の内容が決まりましたよ！それでは早速ですが、こちらの案で準備の方を進めさせていただきます』

配信を終える準備をする。さつさと買い物に行つてこようえ、もう準備するの？

早くない？てつきり後日にするのかと思つていたんだけど

『ええ、そうですよ？善は急げ、こういうのは出来るだけ早めに行動に移さないとですよ？なので申し訳ありませんが配信はここまで、すぐに準備に移りたいと思います』

草

これで配信を終わらせようとするのは草

そのようなことを言われたとしても、今日の配信を続けるようなことはしない。

『なんと言おうとここで配信は終わらせていただきます。それではみなさん、お疲れ様です。さようならー』

さようならー

お疲れさまでした

本当に終わってしまった…

○

「…さて、と」

配信を終え、パソコンの電源を落とし時計の時間を確認する、時計の針は午後二時を指していた。このくらいの時間なら、買い物に行つて帰ってくるだけの時間は取れるだろう。

「…いつものスーパーに行きますか…」

家の玄関を閉め、普段の生活から使う自転車に乗り最寄りのスーパーに向かう、季節は三月。少し寒い風が吹いてはいるが日は照っており、穏やかな温かさを感じる。

「…あの娘も、もう高校二年生か…」

娘の今宵は今年で高校二年生になる。学校では何をしているのだろうか、何度か聞いてみたのだが、帰ってくる言葉は学業の話や授業で何を学んだのだといったものである。

「…友達と仲良くしてきてくれたらいいんだけどね」

人生の中でも最も心の成長が大きいため思春期、その中でも最も多くの経験を得るのは高校での生活であろう。その高校で得た経験はその後の人生において、きっと宝物になることであろう

「…今日は友達の事、話してくれると嬉しいな」

そう思いながら自転車を漕ぐ足に力を籠める、背中の方から暖かい追い風が吹いているように感じ、少し漕ぐのが楽になるような気がした。

○

「ただいまー」

「…ああ、お帰り、今宵」

玄関から帰ってきた娘に声を掛ける、ちょうどいいタイミングで帰ってきてくれたようだ。

「今宵？いまちよつと時間ある？」

「んえ？時間？、まあ一応あるけれども」

「…だったらさ、少し、お茶でもしない？」

「うん、いやよ」

台所から、コップとスプーンをそれぞれ二人分ずつ用意する。そしてテーブルの真ん中にお皿を置き、その中に買ってきたビスケットを入れる

「ん？これ、アイスクリームを買ってきたの？」

「…うん、そうだよ。あと、アイスだけじゃ寂しいかなって思ってビスケットとカフェオレも買ってきたんだ」

「ホント？早く早く！出して出して！」

「…はいはい、今コップに注ぐから待ってね」

コップにカフェオレを注ぎ、娘に渡す。受け取った娘はすぐに席に着き、早速アイスクリームを食べ始めたようだ

「…アイスは美味しい？」

「いや、なに言ってるの？アイスは美味しいのは当たり前では？」

「…そう言う事ではないんだけどね、うん…美味しいのならよかったよ」

何を言ってるんだろう…というような表情を向けられた後、アイスクリームを食べ始める。ゆっくりと味わっているのであろう。一口一口ゆっくりとスプーンで運んでいる。その時の様子といえば、ほっぺたを膨らませてでもぐもぐとしている。

はええええ…すつつつごくかわいい…

「…今宵」

「ふあい、はんへひようか」

「…学校はどう？もうすぐ二年生だし、何か面白いことはあった？」

「んくつ…別に、何も変わってないよ、勉強は大丈夫だし」

「…そう」

学校のことを尋ねると、いつもこのように返される。友達と何を話したのか、どんなことが流行っているのかはあまり教えてもらえない。

ちよつと話が変わるが、アイスの話に持っていこう

「…まあいいや、それよりもアイスは美味しい？」

「うん！、凄くおいしいよ」

「…今宵はどっちのアイスが好き？」

「私が好きな方？そりやあもちろんチョコアイスでしょ！」

「そうなんだね…私はバニラのほうが好きだよ」

「いや、バニラよりもチョコのほうがいいだろ！最強なんだぞ！」

「…いや、チョコだけだと飽きてくるからバニラも好きになってあげて？」

「はい？元から好きなんだが？」

「…どういたしまして」

何を言っているんだろう…という表情を再度向けられる。この場合には素直に引き下がるのが大人と言うモノであろう。

その後、少し言葉を挟みつつゆっくりとした時間が過ぎてゆくのであった。

帰り道の買い物は余裕をもっていきましよう。

●
『皆さん、こんティアー。マネツティアー・ブルースターです！』
こんティアー

こんばんわー

『はい、今日も私の配信に来てくださりありがとうございます。』

配信のあいさつに対してのコメントに返事をする。こういうのはきちんと返さねば気分が悪くなる気がする。

『さて、今回も皆さんと会話デツキを作っていきたいと思いますが…まずはですね、皆さんに言いたいことがございます。』

えっ、いきなり何なんですか

なにかやらかしたんですか

別にそういう問題を起こしたわけではない…私のことをなんだと思っっているのだろうか。

『いやいや、何も問題は起こしていませんよ…そういうのではなくて、前回の配信についてですよ』

前回の配信か

何かまずいことでもしてた？

『いえいえ、どちらかという感謝の言葉ですよ。』

ここはきちんと伝えたいと思っただころだ。なのではつきりと言葉にする。

『今回は皆さんのおかげで会話デツキが構築できて本当に嬉しかったです。おかげで娘と楽しいひと時を過ごすことができました。ええ、配信の後に急いで買い物に行っただんですよ。』

ああ、あの無理やり配信終わらせたやつか

まさかすぐに終わるとは思わなかったな。

『いや…そのお…その節に関しては本当に申し訳ありませんでした。』

あの後、娘が帰ってくるまでに急いで準備したいという気持ち先走ってしまい、あのような強引な終わらせ方をしてしまいました…本当に申し訳ありません』

いいよ

娘は可愛いからね。仕方ないね

あの配信内容ならあんな終わり方でも許せるかも

暖かいコメントが多く流れてくる。批判が飛んでくることも考え少し怖かったが、こういうコメントでそのような気持ちも薄れてゆく。

『…ええ、本当にありがとうございます。皆さん本当にお優しいですね。』

それほどでもない

別にそこまで気にしてない

本当に、暖かいコメントばかりだ

『はい、ありがとうございます…それでは、前回の！会話デッキの結果を語らせていただきたいと思います！』

お礼の言葉もほどほどにして、本題に入ろうと思う。
きたきた

ようやくか

『先ほども話したように、私は急いでアイスを買に行ったんですよ。で、それで急いで家に帰りまして、学校から帰ってくる娘を待っていたんですよ。』

まあそうだよ。娘さんが返ってくるまでに準備しないといけないもんね

コメント欄のいう通り、あの時はとにかく急がねばという気持ちでいっぱいだった。

『ええ、コメントのいう通りなんですけれども、まあ先に家に帰って帰りを待っていたんですよ』

急いで帰ったため準備は間に合い、あとは帰るのを待つだけだった。

『ただいまって言って帰ってくる娘がですねえ…もう可愛くて可愛くて、その時に「おかえりー」って声を掛けたときにですねえ！まあーまつすぐこつちをみて「ただいま」って言ってくれた時の顔がすごくかわいかったんですよー？、学校で疲れているだろうにこちらを見て少しはにかんでくれて、もうほんとに真面目に最高って感じだったんですよ！』

玄関で出迎えたときに浮かべた表情なんてほんつつとつとつに可愛かったんだよねえ…
とうとう始まった。

モンスターの降臨

『その後ですね、まあ一緒にお茶でもしようよーって言ったときにですねえ、まあ少し気だるげな表情だったんですよ。それはそうですよ…だっていきなり帰ってきて「お茶でもない？」って話しかけられても反応に困りますよね』

普通にお菓子を一緒に食べるだけじゃん、なんでそんなに気にするの…

その普通が出来ていれば、ここでこのような配信はしていない。
『年頃の女の子は多感なんですよ…？自覚のない、何気ない一言に傷つくかもしれないですし、不躰に見ていたら気持ち悪がられて嫌われるじゃないですか…』

今の娘に対する思いとしてはこの言葉に尽きる。何が地雷になるのか、とても難しい年頃なのだ。

分かるぞその気持ち…俺も高校生の頃の子供には嫌われたからな

そういう時はきちんと叱らないとだぞ

それは逆効果では…

ここのコメント欄に理解者がいて助かる…そして、叱ったとしても逆効果になることもあるだろうし。

『まあ、一言で言いますと…思春期の子供はとても対応が難しいとい

うことですよ。で、話を戻させていただけます。その後ですね、カフェオレとクッキーもあるよーって言った後の娘の表情と言ったらっ…もうっ…さいっ…こうにかわいかったですねえ！分かりますか皆さん！アイスとクッキーをいれたお皿を前にして笑顔を浮かべている様子を！コップを差し出して「はやく、はやくー！」っていつてカフェオレを催促している笑顔の娘の姿を!!』

オタクが推しを語る口調と同じだあ…

娘の可愛さについて語るというなら、これくらい普通ではないのだろうか…今はともかく、その後について語っていくとしよう。

『それですね！まあアイスをチョコレートとバナラの二種類用意したんですね。で、その時にどっちのアイスがおいしい？って聞いたんですよ…でえ…そのときに「チョコアイスのほうが好きだよ」って言った時の娘の表情と言ったらもう最高でしたね！、ええ！ほっぺを満タンにして見せる笑顔は本当に最力ワでしたよ!』

こうね、こつちをみて「わかってないなあ」って言う感じで、にまあーって小悪魔的な顔をね…うん、最力ワ…

『でもここで会話を終わらせるのもいけないと思い、その後に「私はバナラのほうが好きだよ」っていったんですよ…私が好きというだけではなく、反対の意見を出したらどういう反応をするのかなあーって思ってみたんですよ…もしたらですねえ!「バナラよりチョコのほうがいい、チョコのほうが最強なんだぞ」って返してきたんですよ。それはもうドヤヤっていう表情を浮かべてこれがもう可愛いのかなのって凄まじくやばかったです!!』

どこまで行っても娘可愛いの一言で終わるのは草

一言で終わらせるだど…!?

『それだけで終わらせるのはもったいないでしょうが！せっかくの機会なんですしいっぱいしゃべりたいですしもっと可愛い娘の顔を見

たいというのは間違いではないですよね!？」
確かに

可愛いは正義

『コメントのいう通り！可愛いは正義です！…まあ、本当に聞きたいことは聞けなかったんですけどね』
本当に聞きたいこと？

話すだけじゃなかったのか

もちろんただ可愛いというだけであるなら、日常を見守るだけでは十分ではあるが、流石にそれだけではない。

『その通りですよ…私が聞きたかったのは、学校での生活とかなんですよ』

お菓子を食べているときに聞いてみたのだが、相変わらずはぐらかされてしまったのだ。

あー、いじめられていないかとか？

娘さん可愛いみたいだし、妬みとかやつかみを受けてそう

『そこも心配なんですけれどもね…ただ単純に学校が楽しいのかわかって気になってしまいました…何か友達のことや学校行事のことを聞いてみても「特に変わっていない」としか言われませんでしたし…』
親として気になるのは分かるが流石に踏み込みすぎ

言いたくないこともあるだろうし、気を付けないと余計に話さなくなるよ

うーん、やはり急に聞き出すのはいけなかったようだ…

『…なるほど、少し強引に行きすぎましたかね…わかりました、この話は一度ここで終わりとしましょう』

せやね

考えすぎもよくないね

『わかりました…では、気分を切り替えていきましょう』

気分を切り替えるためにも、配信にの本題に入っていくことにしよう。

『ではでは、今回のテーマについて話していきましょう！今回のテーマは「帰り道に買うちよつとしたお買い物」です！』
帰り道に買うもの？

どこかに寄り道する感じ？

『そうですね！例えば皆さん、学校の帰り道などで、コンビニやスーパー、もしくはスイーツショップなどで買い物をして帰ったことはありませんか？』

私自身も、学生の頃は買い物をして帰ったのだが、今と昔では流行りも変わっていることだろう。

あー、なるほどそっちの買い物か

要するに帰り道にどこか寄って帰ろうってやつ？

『はい！その通りです！ただし、今回のテーマは「何を買うか」です！どこに寄るかというよりは、何を買うかを決めたいと思います！』
買いたい物の指定はある？

ここはある程度絞り込んでおこう。前回では指定しないためにコメント欄が早く流れる事となってしまったし。

『うーん…そうですね…今回は買い物帰りに買って帰るものですか、できるだけ持ち運びがしやすいものがいいと思います。あんまり大きいものとか買って邪魔になるかもしれないですね、そのようなものを選んでしまったりは買いたい物の邪魔になって、本末転倒になってしまいます』

これくらいのものでおかないと、大きい物など際限が無くなってしまう。

りよーかい

帰り道だし、高いものはあんまりよくないね

邪魔にならないくらいなら、片手にもてるのがいいかも

『そうですね…あまり高いものは気が引けますし、片付けもいろいろ大変ですしね…そこも踏まえるとある程度絞られてきますね』
そういうのだとコンビニスイーツとかが定番だけだね

コンビニスイーツかあ…便利だけど少し別のが欲しいところではある。

そう考えていると、一つのコメントが目に入る。

もういつそのこと、帰り道にさ、最初に目についたお菓子でも買えばいいんじゃない？

あつ、この案面白そう

『なるほど…いつそのこと運に身をゆだねるようになしてみましよう。帰り道に目についたお菓子を買うということだ！』

帰り道の幸運ガチャかな？

運に身をゆだねるのか…

『こういうのは勢いも大事と聞きますよ？なにもかも決めていたのは、面白くないかもしれないしね』

考えるだけで実行しないのは、何もしないのと同じだろうし

そういうものかな？

何もかも予定通りだと面白みもなさそうだし

『はい、コメントありがとうございます！では、今回のテーマで決定した内容は「帰り道に、最初に目についたお菓子を買う」といった内容でよろしいでしょうか？』

それでいいと思うよ

ここまで決まればいいものでは？

『了解です…ここであんぬん言ったとしても何も始まりませんし、もしかしたら良い結果にもしれませんし…』

そろそろ、終わりの挨拶をしましょう。

『それでは、今回の配信はここまでとさせていただきます…それでは皆さん、さようならー』

さよならー

お疲れ様でしたー

○

「…人参、玉ねぎ、ジャガイモ、豚バラ肉…あとはカレールーかな？」

「パパー、カレールーとってきたよー」

「…あつ今宵、うん…ルーを持ってきてくれたんだね…ありがとう」
「うん、感謝するといいぞー！」

今日は金曜日。いつも買い物で利用するスーパーは、平日の時とは違い多くの人で賑わっていた。金曜日でもあるからだろうか、家族連れがおおく、殆どの客のカートは山盛りの商品で埋め尽くされていた。

「…今日は手伝ってくれてありがとうね、冷蔵庫の中身が少なくなっていること忘れてて、一杯買い物をしていないといけなくなっちゃって」
「もうう、パパもうっかりさんなんだから、私がいなかったら大変だったでしょ!?!感謝してほしいねー！」

「うん、本当にありがとうね、今宵がいなかったらどうなっていたんだろうね。」

「むふふーん。そうそう、そうやって感謝するのだぞー！」

「はいはい…」

普段から利用しているこのスーパーは、金曜日には特売日になる。多分ではあるが、ここは学校も近く家族連れも多く住んでいるのだろう。そのため、土日は家でゆっくりと休む家庭も多く、土日の分を買う家族であふれているのだろう。そこに合わせて、スーパーは特売日を定めているのであろう。

私自身もこの日に買い物をするのだが、今回は冷蔵庫の中身を確認しておらず、一人で運ぶには少しきつい量となってしまったのだ。

そのため、朝の時に学校に向かう今宵に声を掛け、夕方、学校が終わり帰宅途中の今宵を迎えに行き、そのままスーパーの方に向かったのである。

「…今宵は辛いのだめだったよね、取ってきてくれたルーも甘口だったし」

「なんだよー！辛いのが食べられないとダメだとも言いたいのか！」

「…いや、別にそういうわけではないよ…私も辛いのはダメな方だし」
「ほっほーう？パパもダメダメなんですか？」

「…うん、そうだよ？今宵とおそろいだね…」

「私は弱くないんだが！今はダメなだけでいつか必ず克服するんだが！」

「うん、一緒に克服していこうね」

車の中で夕飯の話をしていたとき、冷蔵庫の中身がなかったのを思い出し、今日はいつもより荷物が多くなるし、夕飯も何を作ろうか、という話をしていたのである。その時に娘が「今日カレー食べたい」といったので、休日の分の買い物を含め、材料を買っているところである。

「…さて、買いたい物も集まったし、そろそろ精算しようか」

「はーい、これ持っていけばいいの？」

「…うん、そつちのかごをお願いね？」

商品が比較的少ない方のカゴを今宵に渡す。あとはレジにて精算するだけだ。

レジにて商品を運ぶと、ピークが過ぎていたのだろうか…先程までごった返していた客の数は半分くらいに減っており、すんなりとレジに入ることが出来た。レジの人を見ると比較的若い容姿をした、普段は見かけない人が入っていた。よく見ると腕に研修中の腕章をつけている。どうやら新しく入った新人のようだ。

「お買い上げありがとうございます。今日はカゴ一杯に買われるんですね！」

「…まあ、明日から休日だからね…ここの金曜日は忙しいでしょう？」

「いえいえ、大丈夫ですよ！皆さん優しいので！」

店員さんと他愛もない雑談をする。こういう雑談をする人は珍しいな、と思いつつ雑談を続ける。娘は店員の視線が気になるのだろうか、私の後ろの方に隠れてスマホを弄っているようだ。

その様子を見て、何か思ったのだろう、ふいに店員がこのように返してきた

「そちらの方はお連れの方ですか？凄く可愛らしいですね！」

「えっ、そうですか？ありがとうございます」

「ええ、ホントに可愛いです…」

店員さんが娘のことを可愛いと言っている。自身の娘という身内鼻肩があるかもしれないが、こういう風に褒められているのを聞くのは悪くない気分だ。娘も顔を背けているが、耳が少し赤く染まっているのがわかる。その様子を見てみると店員さんが続けて呟いた。

「ええ、本当に可愛いですよ…姉妹仲良く買い物なんて、うらやましいですー!」

「ブッフオオwww」

「…姉妹じゃないです!!」

店員がそうつぶやいた後、耐えきれなかつたのだろうか、娘が盛大に嘔き出している。しかも抑えきれないのか、その後もずっと抑えるように笑っている様子である。

訂正しよう、今の気持ちは非常に悲しい気持ちである。

○

「…なにもあんなに笑うことはないんじゃないかな?」

「いつ、いやっ、だって…まさか姉妹とが予想できるわけないでしょうっ!」

「…少しは手助けをしてくれてもよかつたとは思わない?」

「…いや、知らない人に声かけるの怖いし…」

「…ああ、そうなのかい」

あの後、つい大きな声で否定してしまい、周囲の店員さんが集まってくるという事態になってしまった。幸運なことに集まってきた店員の中に顔見知りの人がいた為、自身の説明がスムーズに終わり、迷惑を掛けたことについては軽い謝罪程度で済んだようだ…

最も、今回の件について新人さんは「…嘘でしょ?だってこんなに細かいし、顔つきも年が離れてるといえば違和感ないし…ええ…」と、何だか納得はしていないような雰囲気醸し出していたが。

「…はあ、何だか今日は疲れたね…」

「ほんとにそうだね、ちよっとした騒ぎになっちゃったし」

「…こういうときは甘いものでも欲しいよ。」

「ん?まだ何か買う?」

「…うーん、そうだねえ…」

娘の問いかけに対して、少し考える…たしか、ここのスーパーの近くにはクレープ屋さんがあったような…

「…ねえ今宵？少し寄り道したいところがあるんだけど、いいかな？」
「ん？どうしたの急に…もう買い物終わったんでしょ？早く帰らないとご飯作るの間に合わないよ？」

「…少しだけ付き合ってくれる？たぶん十分もかからないと思うから」

「???まあいいけどさ…」

娘を連れて近くのクレープ屋さんに向かう、買い物帰りということもあり、店内の客の数はそれほど多くはないようだ。これくらいなら注文しても、すぐに出来上がることだろう。

…あつ、これ、もしかしたら財布の中のお金が足りないかもしれないらしい…

「今宵？好きなものを選んでいいよ」

「うん、わかった。…私このチョコバナナが欲しいかな」

「…私はイチゴチョコでお願いします…」

注文は二人分。銀行に行けばお金は下せるだろうが、さすがに今からお金をおろしてくるといふのは時間のかかる行為であろう。

「あれ…パパ二人分しか買わないの？ママの分がないよ？」

「ごめんね今宵…さっきの買い物で手持ちのお金を全部使っちゃったみたいだね、うん…」

「えっ、ホント？…なんでさっきお金おろしに行かなかったのさ」

「…いや、これくらいなら足りるかなーって思ってたさ…それに、今からおろしに行っても時間がかかるだろうしね…これは今宵と母さんの分っていうことでいいかな？」

「私はいいいけどさあ…パパはそれでいいの？」

「…今日のご事は仕方ないよ、誰もお金が足りないなんて考えてなかったんだし」

「ふーん…」

少し含みのあるような答えをした娘をよそに、出来上がった二つのクレープを受け取り駐車場に向かう。

荷物を後ろのトランクに積み、自動車を発進させる。自宅に帰りつくまでには少し時間がある。少し、聞いてみてもいいだろうか。

「…ねえ今宵、今日みたいにさあ…」

「ん、いきなりどうしたの？」

「いや、今日の帰り道みたいだね、誰かとお菓子とか買って帰ったりしないのかなって」

「…いや、いつもまっすぐ家に帰ってるよ…」

「…お誘いとか受けないの？ たぶん、みんな今宵とおしやべりとかしてみたいって人いると思うよ」

「…そんなの関係ないじゃん、ていうかパパ昔から「危ないから学校が終わったら早く帰ってきなさい」っていつも言ってたじゃん」

「まあ、いつも言ってたけどね…」

そう呟くと、顔を窓の方に向け、落ちてゆく夕焼けを見続けていた。窓を向くときに見せた顔は、何を考えているのだろうか、少し憂鬱気な表情を浮かべていた。学校で嫌なことでもあったのだろうか…それとも、何かやりたいことでもあるのだろうか、そう考えながら帰路に着くのであった。

○

「ただいまー」

「…ただいま」

帰宅した後、後ろのトランクから買い物を取り出し、玄関に運ぶ。扉をあけ、帰宅の言葉を共に中に入る。

その際、玄関の吃置き場を見ると、すでに一足の靴が揃えられてあった。

ああ、なるほど…先に帰っていたのか…

荷物を台所に運ぶため、リビングに入る。

「ただいま、千景」

「ママ、ただいまー!」

「ああ、お帰り二人とも」

今日は仕事が早く終わったのだろうか、リビングには妻が椅子に座りくつろいでいた。

「今日は早かったね、仕事はもう終わったのかい？」

「まあ、そんなところだ。二人は今帰ったと聞いたところか？」

「まあね、買い物がいつもとより多くなってね…うん、今から夕飯の支度をするから、それまでゆつくりしててくれるかい？」

「そうだな、夕飯ができるまでゆつくりさせてもらおうとするよ」

そう言ったのち、妻は背筋を伸ばしたと思うと、机に頬杖をつき、ぐったりとしている。よほど仕事で疲れたのだろうか、こちらを見続けているようだ。

夕飯のメニューはカレーであるため、今から作るとなるとそれなりに時間がかかってしまう。材料を切り分け、玉ねぎから順に材料を炒めていく。

料理の最中ではあるがじっと見られているため、視線がくすぐったいように感じる。ここはお疲れ様の思いも込めて、買ってきたばかりのアレを使うとしよう。

「…ちよつと疲れてる？」

「そうだな…今回の案件は少しごたついていてな…中々進展が無いものだからあまり調子が上がらないんだ…」

「本当にお疲れなんだね…夕飯が出来るまで時間もあるし、よかったらこれでも食べる？」

「これ…クレープか？買い物の帰りに買っていたのか」

「そんなところだね、本当は夕飯の後にでも食べようかと思っていたんだけど、カレー作りも時間がかかるし、これくらいなら食べてもいいかなって」

「…そうなのか。ありがとう、いただくとするよ」

一度火を止め、炒めた具材の中に水を入れて沸騰させる。沸騰するまでに少しコンロを離れても大丈夫だろう。その間に買ってきたクレープを妻に渡す。夕飯の前に食べるのはあまり良くないが、出来上がるまでに少し時間がかかる上、気分が上がらないときは甘いものだと相場が決まっているものだろうしね。

渡した後、妻がクレープをこちらに返してきた。なぜだろう、さつきありがとうって言ってくれたのに…

「…どうしたの？食べてもいいのに…」

「いや、なに…夕飯前に食べるには少し多いし、一人で食べるのは少し寂しいからな…うん」

「うん、それで？」

「半分…そう、半分にしようか」

「半分？残りは夕飯の後にでも食べるのかい？」

「そういうわけではないんだがな…」

具材が沸騰するまでの間に調理道具を洗っていると、妻がそのようなことを呟いた。そのあと、少し視線をそらし、何かを思案するような表情を浮かべる。言いたいことが纏まったのだろうか…こちらに向き直して改めて口を開いた

「…一緒に食べないか？一人分を半分にすればちようどいいだろうし」

「えっ…いや、今ご飯作ってるし、それに一人分だから食べられる量が減ってしまうよ？」

「いいんだ、というよりも、一緒に食べたいからこう言っているんだろうか」

「…うん、わかったよ」

妻の言葉に頷き、渡されたクレープを半分に切り分ける。上下に切り分けた為か、イチゴジャムとクリームが少し漏れている。そのため別に皿を用意し、フォークと一緒に渡す。

「はい、切り分けたよ…ちよつと待ってね、今準備するから」

「ああ、ありがとう…それでは、いただきます」

「…うん、いただきます」

沸騰した鍋の火を止め、カレールーをいれて弱火に設定する。そうしたのちに二人でクレープを食べ始める。私が選んだイチゴクリームは、甘酸っぱい味で生地とよく絡み、優しい味となり、幸せな気持ちになった。妻もクレープに舌鼓を打っているのだろう、顔の口角がすこし上がっているのがわかる。少しすると、こちらの目線に気づいたのだろうか、ほんのりと顔を赤め、そっぽを向かれてしまった。

私も少し、恥ずかしい気持ちになってしまい、つい視線を逸らして

しまう。

「…なんだ、その反応は？別にいいだろう？…甘いものを食べても」

「いや…つい可愛いものを見てしまって」

「おい…なんだその反応は」

そのような雑談をしつつ、二人してつい笑ってしまう…こんな時間を過ごすのも悪くないなあ…と思いつつ二人でクレープを食べるのであった。

「…あのー、二人とも？ご飯作っている途中だし、子供ほおっておいて何イチャついているんです？何？あてつけか？こんなにやろうめえ…」

「あ…ごめん」

しまった…つい二人の空間に入ってしまった…そういえば、ご飯が出来るまで待っててねと妻に言ったとき、娘の椅子にすわり、ずっとスマホで暇を潰しつつ待っていたんだった…

この後、急いでお菓子の皿を片付け、夕飯の盛り付けを行うことになった。もちろん、娘はずっと不機嫌のままであり、許してもらうのに次の朝までかかることになってしまったのであった。

あなたの欲しいものは何ですか？

○

…pipipipi…pipipipi…

「…ふあ…うーん、もう…朝か…」

目覚まし時計のアラーム音が鳴り響く。アラーム音を止めようと、時計のボタンに手を伸ばす。時計の針は五時を指していた。

「…んー…そろそろ起きてご飯の準備をしないとね…」

体を起こし、背伸びをする。今から娘のお昼のお弁当と朝食、そのどちらも準備しなければならぬのだ。そのことを考えると眠気が少し和らいできたようだ。

自室を出てキッチンに向かう。

「…今日は何を作ろうかな…うーん」

冷蔵庫の中身を確認する。昨日の夕飯で使わなかった材料は…うん

「今日は卵焼きがメインでいいかな…」

残りの材料からお弁当の具材を決める。あまりこだわりを持って作ろうとしても、材料も足りないし時間もかかる。こういうのは時間との勝負だ。

「…できるだけ早めに作ろう。いつ起きてくるかわからないし」

今日は平日、娘はいつものように学校に行くため、それまでに朝食とお弁当を用意したい所だ。

そのような気持ちを抱えながら食事の準備をするのであった。

○

「…おはよ…」

「おはよう、今宵…先に顔を洗ってきておいで？もう少して朝ごはんが出来るから」

「あーい…」

リビングに降りてきた娘に声を掛ける。見たところ寝起きのまますぐに来たようである。髪の毛が所々は寝ているのも相まって、とても眠たそうである。

「…洗ってきたよー」

「…うん。そうだね…ちよつと待ってね、髪の毛がはねてるよ?」

「うええ…いーじゃん別に、困ることじゃないし」

「少し髪の毛を梳かすだけでしょ、母さんもいつも髪の毛の手入れくらしいしさ…」

「パパもママと同じことを言わないでよ…」

娘がそのようなことを言いながら、私に向けて櫛を差し出してくる。

「…いつも渡してくるけどさ、自分でしようとは、少しは思わないのか?」

「何時ものことでしょ? いい加減パパも分かってくれてると思ってたんだけど」

「…その何時ものことを自分で出来るようになってほしいんだけどね」

「ぐちぐち言わないで早くやって」

「…はいはい」

何時ものようにゴネをこねられ、その様子に折れてつい櫛を受け取ってしまう。このやり取りも何時もの光景になってしまった。

櫛を受け取り、娘の髪をゆつくりと梳かす。下の方からゆつくりと梳かしていくのだが、櫛に引っかかる感じが無い。妻の髪をとかした時は、ほんの少し引っかかる感じがあったのだが、娘の髪にはその感触が微塵もない。

「…今宵も頑張ってるんだね」

「は?…いきなりどうしたの」

「…こつちの話だよ」

ふと眩きを零すと、その眩きが気になったのか娘が問いただしてきたのでお茶を濁す。髪の毛の手入れはすごく大変だろう…妻も以前そんなことを言っていたはず。個人的ではあるが、その妻よりも髪の毛の手入れをしていることだろう。見えないところで一生懸命努力しているんだと思うと嬉しく思う。

「…今宵は何か欲しい物とかないの? もう二年生にもなったんだしさ

…」

「や…特にほしい物なんてないんだけど、いきなりどうしたの？」

「ちよつと聞きたくなっただけだよ…気にしないで？」

「そう？、ヘンなの…」

つい、娘に欲しい物がなにかを聞いてみてしまった、こんなにもおしやれに気を使っているのだ。欲しい物の一つや二つ。あると思っただが、そうでもないらしい。

そのようなやり取りをしつつ、娘の髪を梳かすのを終わる。

「これで良しつと…はい、梳かし終ったよ…」

「ん、ありがと…」

「うん、じゃあそろそろご飯食べようか…学校遅れるよ？」

「はい」

二人して席に着き、ようやく朝食に着く。毎朝このようなやり取りをしているが、それもいつかなくなると思うと寂しいような気がするものだ。

○

「それじゃ、学校いってきまーす」

「…はーい、行ってらっしやーい…途中の車には気を付けるんだよ？」

「はいはい分かっていますよーだ！、見送りするたびに言われれば嫌でも覚えますよーだ」

「うん、覚えてくれてうれしいよ…ほんとに気を付けてね？」

「わかってるー！」

素晴らしいながら、学校へ出かける娘を見送る。玄関から出るときに向けられたとき、舌を出している顔を向けられた。やはり高校生にもなって逐一言われるのは恥ずかしいのだろう。

「…うん、やっぱり何か買ってあげようかな…」

ふと、そのような考えが浮かび上がる。高校二年生にもなったのだ。進級のお祝いとしても何か買ってあげるのもいいだろう。しかし、何を買ってあげたらいいのだろうか…あ、そうか…

「…よし、配信しよう」

「ここはネットの力の使いどころだろう。」

『皆さん、こんティアー！、マネツティア・ブルースターです！』
こんティアー

こんにちわー
待ってましたよー

『はい、皆さんこんティアーです。今回も配信を見ていただき、ありがとうございます』

配信の挨拶をリスナーに返す。このやり取りをすると、配信が始まったと感じる。

『さて、今回の配信の本題に入る前に、前回の配信の結果でもお話ししましょうか』
まっつた

前回の配信って確か帰り道の買い物談義だっけ？

『そうですね。買い物帰りに何か買って帰ろうか…といった配信内容でしたね』

前回の配信の内容を振り返りながら話を続ける。前回の配信を見ている人もいたようで、コメントにて返信が書き込まれる。

うんうん、確かにその内容だった。
帰り道に初めに目に入ったお菓子を買って帰るってなっていたはず。

『ええ、その通りですよ。皆さんで帰り道に、視界に入ったお菓子を買って帰るとい内容でした。』

そろそろ前回の配信の結果を話していこう。

『それでは配信の後の話をしますね…まず、いつものように娘に買い物に付き合ってもらったんですよ』
まず…

娘さん、買い物に付き合ってくれるのか…

これはつよい

私の場合は頼めば着いてきてくれる…そういうのは珍しいことなのだろうか…

『え、そうなんですか？私の場合、お願いしたら大体は手伝ってくれるんですけどもね…』

は？強くないか？

うらやましいですねえ…

うちの娘は絶対に来ないんだよなあ

コメントから見ても、このような関係は珍しいのだろうか…何だか悲観的なコメントが流れている。

『そうなんですか？それですと私の娘はとても素敵な娘なのでしょうねっ…にゅふふふふ』

うっわ、すごい声出てる…

これが親バカの声ですか…

しまった…つい笑い声が漏れ出てしまった。いけないいけない、話の続きをしないと…

『ん”ん”』話が脱線してしまいましたね…まあ、買い物といっても夕飯の買い出しですからね。時間も下校と合わせて調整しましたし…それですね、買い物を済ませた後に、目的通り最初に目についてお菓子を買って帰ったんですよ』

ほおーん…

それで、結局何を買ったんですか？

『そこで目に着いたのがクレープ屋さんだったんですよ。これなら丁度いいかなって思ったんですよー

手にもてる商品ですし、はずれがないお菓子でしたし』

クレープねえ

クレープのメニューによっては地雷になりえるんだけど

ここで取れ高みみたいなのを求めるようなことはしない。というか何を期待しているんだろうか…

『いえいえ、そんな奇抜なメニューを頼むつもりはありませんよ。今回、私達が頼んだのはチョコバナナとイチゴチョコでしたしね』

なーんだ…面白くないの…

ん？もしかして二人分だけ買ったの？

子供がいる以上、奥さんもいるんでしょ？その人の分は買わなかったの？

『…ん？ああ、そうですね、ちょっと説明が足りませんでしたね』

コメントの補足をしておこう、勘違いがないようにしておかないと。

『先に言いますと…私のミスで、三人分を買う余裕がなかったため、二人分を買った、という話になります。ええ、妻と娘の分を買って帰ったんですよ。』

そうなんですか…

嫁と娘を優先するのは普通にいい人

銀行とかATMでお金をおろすという手段は無かったの？

『いやあ…それに気づいたのがですね…注文してからのことでしたし、その後に夕飯を作る時間のことを考えるとおろしに行くのは時間がもったいないかなって思いました…』

お金をおろすのに、ATMまで移動しなければならぬし…注文した後ということもあって時間もなかったしね…

あつ…そうか、買い物帰りだからか…

夕飯だとすると時間も惜しいしね

『コメントの言う通りですよ…そういうわけです、その後は帰って大急ぎで夕飯を作っていたわけですよ…妻も帰ってきていましたからね…』

なるほどね…

共働き？

『まあそう知ったところでしょうか…どちらかという妻の収入の方が多いですね…はい。一応私でも家計は維持できる…とは思いますが妻の方が凄いですので…ね？』

妻の方が絶対に忙しいのに、暇があれば家事をしてくれていることもあるのだ…そんな妻に無理はさせられないというものになるほどねえ…

だから急ぎだったんだね

『ええ、日々頑張っている妻のためにも、家事炊事など出来ることは私
が何とかしてあげたいですからねえ…』

出来る限りは、私が頑張りたい所ではある。

これはよき家庭

家事が出来るお父さんは珍しい

家事は昔の一人暮らしで得た物の一つなだけどね…そこまで出
来るといってもないし…

『家事が出来るといってもそこまで凝った料理などはできませんよ…
それです、まあ、帰った後すぐにカレー作りにいそしんでいたわ
けですよ…でもカレー作りって結構時間がかかるじゃないですか…』
まあ、確かにね…

材料とか、作るの簡単だけど煮込む時間が掛かるよね…

『そうですよねえ…なので、待ち時間の繋ぎとしてクレープを渡した
んです。夕飯の前だとしてもクレープ一つくらいなら大丈夫か
なって思いました』

どうしてもカレーづくりには時間が掛かってしまうからね…苦肉
の策である…

夕飯前のお菓子は行儀が悪いゾ？

この場合は夕飯が出来ていないのでセーフ

コメントでも意見があるが、この場合は夕飯まで時間があるので大
丈夫だと思う…多分

『いろいろな意見があるでしょうが、私の場合は30分以上かかるの
で…そこまで何もなし、というのは辛いですからね…それです、
渡したんですけれども、突き返されてしまいました』

クレープ嫌いだったん？

そういうのじゃないんですけどね？はい

『違いますよ？その後にですね、「半分に分けてくれ」って言ってくれ
たんですよ？その後に「一緒に食べたいから」って言ってくれたんで
すよ！！…』

あの時はほんつとに凄かった…！

あ、エンジン入った

声の調子が上がってきた

『もうほんっつとにですね！こちらに顔を向けてね！お皿を出してね「お願いね」って見たいにですね！顔をコテンと傾けていた様子がもうすつごく素敵でしてねえ!!…その様子をじつと見ているとですね…ぷいって顔を背けていたんですよ！分かりますか！顔は見えないですけどもほんのりと耳が赤くなっているのを見たときの気持ち!!もうすつごく愛おしいって感じがあふれていたんですよね!』
妻のテレ顔と拗ねた表情が合わさったあのような表情は凄く良かった。もう、言葉では言えないくらいに言葉の速度が早い早い

好きなものを前に語る早口オタク君・・・

『でー、その後二人で一緒に食べておいしいねーっとなっていたんですよ…ええ、色々と忘れていまして…このやり取り、娘の目の前でしていたんですよ…』
あっ…

これは凄く恥ずかしいやつ

この時は凄く恥ずかしかった…妻と二人して顔を赤くしたあと、同じように顔が真っ青になっていたからね…

『いや…その…ほんとにね…ご飯の準備しながらでしたけど…じとーとした目で「早くご飯準備して」って見られてましたねえ…はい、すごく恥ずかしかったです、本当に』

これはいけませんねえ

娘さんを放置は草

『その後は必死に謝りましたよ…夕飯の間はむすーっとしてましたし、その後は私の分のクレープを条件に機嫌を直してくれましたけれどもね…』

最初は目を合わせてくれなかったし、クレープも受け取ってくれた時もほぼ無言で睨まれて怖かったのは内緒である。
割と簡単に許してくれるのな

クレープで許してくれる娘さん可愛い

『そんなところも含めて可愛いのが娘ですもの…クレープを食べている娘もすさまじく可愛いですしね』

ぽかぽか家族

本当にね、私にはもつたないくらいに素敵な家族ですよ…

『はい、まあ…そんなところでして、前回の配信内容を実践した結果でした…いやあ、すごく良い時間でしたよ』

そろそろ今回の配信の主題に入っていくことにしましょう

『さて…ここまで話をしましたので…今回のテーマについて話していきましようか!』

ようやくか

待ってましたよ!!

コメントも今回のテーマ配信を待っていたようだ

『ではでは…今回のテーマを言いましようか!…ずばり、「あなたの欲しいものは何ですか」です!』

欲しいもの?

何か買うの?

『コメントの言う通りですが、つまりはそういう所です…要するに娘に何か欲しいものがないか聞いてみて、それをプレゼントしようというテーマです!』

また急なテーマですな

なんでいきなりプレゼントなの?そこが気になるんだが…

『一言で言いますと、進級祝い、とでも言えばいいのでしょうか…娘に聞いてみてもあまり欲しいものは言ってくれないですし、どちらかというと妻に相談している事の方が多いですし』

洋服などはおつぱら妻にお願いしているし、それ以外の相談も聞いているのは妻の方が多いのである

それはそうでしょうに…

親とはいえ、父には言いつらいでしょうよ…

『やはりそうすよね…でも、そこをどうにかするのがこの配信のテーマです!』

せやな!

確かに配信の目的そうだったわ

『さて! 始めにどうやって話しかけるか…ですよね! ここをきちんとしないと欲しいものが聞けませんし』

始めが肝心なのは確かですね。

そうだよね…失敗するとそもそも話に繋がらないし

『そうなんですよ…ここは何と言って声を掛けるべきでしょうかね…』

本当に難しいことである…なんて声かけたらいいんだろうね?

いや、ここは普通に進級祝いでいいですよ。下手に理由を付けるよりかはいいと思う

『そうでしょうか…うん、ならシンプルに考えた方がいいですね! 声を掛けるのは進級祝いということですよ!』

それで問題ないと思うよ

あとは話しかけるだけやね

『…思ったよりもシンプルに終わりましたね。内容も簡単なことですし』

あまり深く考えすぎなものも良くないよ?

娘さんのこと好きだから大丈夫でしょ

下手に言葉使うと余計にヘンになるし

『そんなものなのでしょうか…』

深く考えすぎて、思考がドツボにはまっていたのかもしれない…
そんなもんでしょ

テーマによるけど、今回ののは別にテーマするほどでもないような…

まあこうして配信してくれるのは嬉しいから構わないんだけどね

『わかりました…それでは、今回の配信はここまでにしたいと思えます! それでは皆さんお疲れ様でした! さようなら!』

さようなら!

お疲れ様でした!

バイバイ

○

「…ただいま…」

「ああ、お帰り、今宵…学校お疲れ様」

「…うん」

「…あれ？どうかしたの？」

「別に…うん、何でもない」

帰ってきた娘に言葉を掛ける。何か考え事をしていたのだろうか。声を掛けたときに別の方を向いていたようで、こちらに気づくのが少し遅かったように感じる。

すこし気になってしまいが、先に聞いてみるとしよう。

「今宵？ちよつといいかな？」

「…ハイ、何でしょうか？」

「いや、何で丁寧に話しているの？…まあいいや、聞きたいことがあるんだけどいい？」

「…うん」

何だが緊張しているように感じる、何かあったんだらうか…

「今宵はさ、何か欲しい物とか何のかなって…」

「それ、朝にも聞いたことだよね…どうしたの？」

「そうだね…でもさ、進級したことだし、新しいこともしたいと思わない？だから何かないかなーって思ってたね」

「なんだそっちか…うん、今なら丁度いいよね…」

私がそのように言った後、娘はこちらを見据え、改めて言葉を吐き出した。

「あのね、私…新しいパソコンが欲しいの…！」

「うん？…新しいパソコンかい？」

新しいパソコンが欲しいと言ってきた事に、少し違和感を覚える。たしか、娘の使うパソコンは高校の入学祝いに買ってあげた物なのである。故障でもしたのだろうか…

「…今使っているパソコンが故障したのかい…？修理ぐらいならいつでも出せるよ？」

「ちがうの…そういうことじゃないの…えつと…えつとね…」

「落ち着いて、ゆっくりと話してごらん？」

少し言葉が詰まっているようであるため、ゆっくりと落ち着かせる。

そして、娘からの言葉を待つ。

「あのね…私、V t u b e rになるから…！」

「…はい？」

「だから…私！V t u b e rになるから！、配信用のパソコンが欲しいの!!」

「…o h」

突然の娘の言葉について思考が止まってしまい、言葉が出なくなってしまう…

どうしてこうなった…？